

四谷の

千枚田だより



第107号

の棚田の衰退を危惧する同士であり、翌年には

全国棚田サ

「千枚田 今昔」

過日、メディアの方から「この千枚田を耕す最高年齢者はお幾つの方ですか。」と聞かれた。急に聞かれてもはてさて返答にとまどった。一虎サは息子が手伝うし(耕す)、細尾でも親子三代でやっておる。いったい誰になるのか?よくよく考えてみたらIターンの柳ちやが七十六才で次は自分(舜七十一才)になつてしまう。まったく、聞かれてビックリ、知ってガツカリであった。いつまでも「あぐら」をかいていてはいけない、もう、そろそろどこころではない、早い引退(会長)を考えねばと、思うことしきりである。

思えば平成三年、五十才の誕生日に「ふるさとお役にたちたい」と千枚田の保全・継承に取り組んだ。以来、写真を撮り溜め、平成六年の愛知国体山岳競技会場「やまびこの丘」ギャラリーで全国発信。たまたま訪れたふるさとキャラバンの平塚順子チーフプロデューサーも全国

ミットが開催され、現在に至る。

棚田の保全には耕作者だけでは限界がみえる。何とか行政の受け皿として「保存会」の設立を望むものの役員全員が「有名になると人が来てしょうがない。望遠レンズで狙われたり、安気に小便もできん」と反対。ああだこうだのうち平成九年一月十二日、なんとか「鞍掛山麓千枚田保存会」が発足した。

平成十五年には「ふるさと水と土ふれあい事業」による作業道やふれあい広場が整備された。それまでは畦道に毛が生えた程度の細い道で耕耘機の出し入れにも命がけ、人手を借りやつとであったがおかげで軽トラがスイスイ。もう、背負板も用なしだ。(舜)は平成十一年、町民の主張で「ふるさと水と土ふれあい事業」で作業道が完成した暁には「全国棚田サミット」を招致したいと発表。平成十七年九月にはサミットを開催。その、数日後(十月)には

平成の大合併で新城市となり、鳳来町最後の記念すべき大イベントとなった。

農村アメニティ・コンクール、田園自然再生コンクール大臣賞など、数々の賞や指定を受けた。また、生物多様性国際会議(COP10)の招致コマーシャル誌やアサヒスーパードライのポスターにも撮り溜めた写真や「四谷の千枚田だより」の発行を続けたことが少しはお役にたてたことと思うし連谷地区の活性化に



も繋がったとも思う。棚田を核にするさを残したい一心で田んぼの周辺や道で行き会う地元の人から「今日も写真かん、：：暇でいいのん」などと揶揄されも、我慢し続けて二十一年。美しい姿の鞍掛山の恵みを受けた「湧き水、天日干し、これ以上贅沢な米は他にない。それに、生きものと共生した体にやさしい米づくり」を主眼に棚田の保全と「むらづくり」に今日も駆けずりまわっている。

撤退

知名度も高まり自然環境に恵まれた千枚田で「稲作をしたい」というような団体が取組んだ。地元の方々は冷静にみていたが全国的に棚田保全に都市住民が興味を抱き「オーナー制度」なるものが推奨されている。当地では棚田を遊園地化されることを危惧し、田植えから収穫までの全ての農作業に責任を持って行う「小作制度？」の策を講じた。

平成八年を始めとして幾組も稲作に挑んだものの簡単に撤退していった。その幾つかの事例から、年間二百七十余名が農作業に訪れていたグループが、ある日、視察の案内中「小山さん いろいろお世話になったが今日限りで田んぼをやめます。立つ鳥、跡を濁さずの諺どおりきちんとしておきます。」その言葉を最後に一度も来なくなってしまう。地主に泣きつかれ現在では(舜)が管理しているものの初めの二年間はヒエやカヤツリグサ取りが毎朝の日課で、やっと田んぼを元通りにした矢先、千枚田の入り口で人目一番付く田んぼも田植えの支度に一向とこない。千五百本のロウソクを灯す「感謝の夕べ」も真近に迫り、問いただしたところ「今年はやめやすワ」の一言。「感謝の夕べ」に田植えがしてないとイメーダウン。とりあえず何とかしようと田植えまで扱ぎ付けたものの稲よりヒエや雑草が生い茂り皆んなの手を借り、やつと何とか「田んぼ」らしくなったが(写真) これをみた地元の百姓から「こんなもんサ」と冷ややかなエールを頂いた。

やめやすワ」の一言。「感謝の夕べ」に田植えがしてないとイメーダウン。とりあえず何とかしようと田植えまで扱ぎ付けたものの稲よりヒエや雑草が生い茂り皆んなの手を借り、やつと何とか「田んぼ」らしくなったが(写真) これをみた地元の百姓から「こんなもんサ」と冷ややかなエールを頂いた。



原田英史(ふるさと指導員・理事)も同様、県立新城高校の実習田として再活用。田んぼとしての機能回復のため入梅の降りしきる雨の中、「ヒエ取り」に余念がない。まだまだ、田んぼの遊園地化など苦言は尽きないが、ここらで止める。

校外学習

ビオトープの説明を熱心に聞く



六月五日、市立鳳来中部小学校五年生二十九名は千枚田で自然環境、生物多様性などを学んだ。この学習会は「あいち森と緑づくり・環境学習」を活用。作成した千枚田に係わる冊子や資料をもとに保存会員(高橋孝行、今泉雅男、夏目宏一、小山舜二)の指導で行われた。

小さな旅 (NHK(総合))

六月二十四日、日曜日の午前八時から三十年以上の歴史ある「小さな旅」が放送された。その日は放送を観たと都市近郊から続々千枚田を訪れ、地元の百姓は田んぼの見廻りに「すみません」と謝って行くほどの賑わいをみせた。

県議員後援会視察

七月六日、名古屋市天白区の須崎県議の後援会百六十名が訪れ、素晴らしい景観と千枚田を守る地域住民の底力に惜しみない賛辞をいただいた。また、須崎・峰野両県議は昼食時のわずかな時間を割いて千枚田を訪れ、三名で作業道を往復。千枚田を保存する厳しい現状を説明。大きな理解をいただいた。

作業道補修

梅雨前線の被害を受け、作業道二箇所が陥没、沈下した。このままでは大きく崩壊してしまうことから七月二日、今泉雅男、高橋伸治、高橋庄一が四日には今泉雅男、原田武典、小山泰弘、高橋孝行、小山舜二の出役により応急手当を施した。



行 平成二十四年七月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
文責 小山舜二